

## 夢のあと

福井雅人

八年前の一月に父が亡くなり、二ヶ月後の三月に母が亡くなり、あつと言う間に私の二人への病院通いも終わったのである。もとより気の弱い私ではあるが、この事が私に与える影響はどうなるであろうか？ 私も私の妹弟きょうだいも心配したが、私自身びっくりする位に平静だった。と言うより入院してあつと言う間に逝ってしまった両親を受け入れざるを得なかった。何故にこんなに早く二人共。

私の父はお酒が無いと駄目な人だった。私がまだ若い頃、父に反発すると云う事は少なかったが、何か父が私に対して怒るといふ事ができず、お酒を飲んで帰った時、而もかなり酔っ払った時に酒の力を変え射て言いたい事を言ったものだった。今にして思えば他愛もない事だ。父親なら怒っても当然の事、息子でも当然言われたくない事だ。しかしそれが素面では言えない。何故堂々と私の顔を見て話しが出来ないのか？ 私はそんな父が嫌で嫌で堪らなかつた。父のこういうところは何処へ行っても同じだった。親戚の集まりがあると出来る酒の席で、さっそく酔っ払った父が突然立ち上がると、「一番福井久和、黒田節を歌います！」と言うとこんな酷い黒田節はないだろう、という位の「酒くけはく飲くめく飲くむくなくらあくばく！」とこつちも酒を飲まなきや聞いていられない黒田節を謳い上げるのだ。私は心の中で「もうやめてくれー」と叫んでいた。まだカラオケなど無い時代である。定年退職してからは、毎晩のように家でビールや日本酒を飲んでいた父だが、どうも家で本を読みながらだけでは発散出来ないのか、たまに近くの居酒屋で飲む事もあった。ところが飲みに出たのはいいがなかなか帰って来ず、母から「ちよつと様子を見て来て頂だい」と言われ、まったく仕方がないなあなどとぶつぶつ言いながら、居酒屋の窓越しに中を覗いてみると、知り合いでもない他酔っ払った親父達になにやら頭をペコペコ下げてこれから帰るところだった。「なんだ親父はどこへ行ってもこんな調子か？」となんだか悲しくなってしまうが、当の父はお酒が入ってご機嫌でそんな事などお構い無しで、僕としても十分大人になっていたから千鳥足になった父の肩を抱いて二人でよろよろ帰ったのだった。あんなに酔っ払いの親父が嫌いだったのに。今では父の悲哀が分かるような気がする。それは父が若い頃結核を患いそこから甦よみがえった事。いっもどこか自信なげなところ。晩年家に居る時間のほとんどを本を読んでいたのだが、どこか淋しげなところ。私にしてみたところで子供の頃、小児喘息を患い、病院のベッドの上で点滴を打たれて手足を吊るされた暗い幼少時代。それから五十年、半世紀以上が経ち、

コロナ化の病院で首の腫瘍を除去する手術が終わった後、病院のベッドの上で手足を吊るされて点滴を打たれ、あの子供時代を思い出して、なんだ俺は、あの時代を踏み台に、此処迄生きて来たんじゃないのか？と少しばかり感傷に浸ったが、でもそれはその時だけだ。何故なら僕はまだ生きている、令和の現在いまを生きている昭和生れの令和の男だ。生きていく以上前を見なければならぬ。それは幾つになっても同じ事だ。唯、今は経験がある。だから僕は少し悲哀にくれそうになっても、天国の父にこう問いかけるんだ。「親父、元気でやっているかい？ お酒は飲んでいるかい？」父が、僕が二十歳になったら、一緒に酒でも飲みたかった事、結局一回も叶わなかったな。だから今夜は一緒に飲もうや、缶ビール片手に二人だけで。何のわだかまりもなく飲めそうな気がする。

——父からの遠い呼び声が聴こえる——